大震災の障害者の死者・行方不明者は２．５％

報道記事「震災犠牲者、障害者は２倍　死亡・不明２％、内閣府推計」が目に止まった。

記事の概要は、「大震災で被災した沿岸部に住んでいた死者・行方不明者は住民全体の１％弱だが、内閣府による２７の障害者団体への聞き取り調査では障害者の死者・行方不明者は２．５％」とか。

でも、団体に所属していない障害者もいたと思われるので、今後この割合は増すものと思われる。

大震災による犠牲者は建物の倒壊によるものでなく、圧倒的に津波による犠牲者と思われる。

岩手県の田老地区には、津波が来た時は家族を差し置いても「命てんでんこ（自分の命は自分で守れ）」という言い伝えがあるとか。

最近の報道で分かるように、あの瞬間はまず自分が津波から逃げることを誰もが考えて行動したと思うだけに、高台等へ避難する移動に不自由がある障害者や高齢者が津波の犠牲になったであろうことは、残念ながら容易に推察される。

強い揺れや津波が迫ってきたあの瞬間、障害者はどういった思いだったのかと想像するに、胸が締め付けられる。

そうした降り、偶然目にしたマンションに一人でいたある重度身体障害者のブログに、次のような一節（抜粋）があった。

「『あぁ～！このマンションが潰れるまで、揺れるんだなぁ～』と覚悟を決めて、慌てたり焦ることもなく自分でも不思議なくらいに妙に落ち着き、ただただ茫然と部屋とともに揺れていた……。

今、思うとなぜあんなに揺れていたのに、自分でも驚くほどに冷静だったのか、自分でも不思議で、『死』に対して恐れていないからか？ と思った……。」

一人ではドアも開けられず、停電で助けを求めようにも通信手段もなかったよう。

どうしてこうも冷静だったのかと想像するに、自らの力の及ばない不都合（自らの障害から自らの力では逃げられないという現実）にどう向き合うかを考えざるを得えなかった日々から、受容能力（自分に不都合が起きた時に、その不都合さの中でも人間として生きているという証を見ることができる能力）が、我々以上に育まれていたのでないかなと、ふと思った。

阿部幸泰　　（2011 年 5 月 29 日　記）